

土地の持つ記憶を有効に活用

横浜赤レンガ倉庫



歴史を感じさせる赤レンガ倉庫の外観。煉瓦壁体の中に帯状の鉄を水平に積み込み、要所を鉄棒で垂直に固定する「碇鉄構法」を採用したことで関東大震災の影響も少なく、建築技術史上でも完成された煉瓦造建築と言われている。屋根の上に乗っているのは、倉庫のシンボルとも言うべき、復元された避雷針

ナビゲーター
横浜市港湾局
CITY OF
YOKOHAMA
Port And
Harbor Bureau

港の持つ魅力を再発見させる

「コンテナ船が主流になっている現代の港では、かつての中心部は寂れてしまっていることが多い。横浜港もその例外ではなかったが、横浜市は、その親水空間としての意味に着目し、旧港地域の再開発を積極的に進めてきた。その中核施設として、人気を集めているのが「横浜赤レンガ倉庫」である。

同倉庫は、明治時代に貿易振興のために造られたもので、一号倉庫と二号倉庫の二棟がある。ともに煉瓦造三階建（一部四階）という大きさを、鉄材を補強材として使っているのははじめ、非常用水道管や防火壁などが備えられた、当時としては最先端の



ウォーターフロントに立つ横浜赤レンガ倉庫。右が文化発信や市民文化の活動拠点として活用される1号館で、左がレストランやショップが集まった2号館。また、2つの建物の間に設けられた広場は、さまざまなイベントなどに利用できる空間になっている



赤レンガ倉庫には、倉庫の由来などを説明するパネルなどは置かれていないが、唯一、説明的な文章が書かれているのが、2号館の3階にあるホール壁



建物内部には、かつて倉庫だった時に使用されていた防火扉などを、取壊してそのまま残して使用している。凝った意匠など、現代建築ではほとんど見ることができないものも多く、まさに『歴史』が感じられる



1号館のエントランスロビーの床には、スケルトン状態になった展示スペースが設けられ、その中には、かつて倉庫で使用されていた備品が置かれている。これは屋根に乗っていた避雷針



2号館の最上階(3階)にある「BEER NEXT」(ダイニングレストラン)の屋根は、倉庫時代のままに鉄骨やトタン屋根が剥き出しになっているが、それがまたレトロな雰囲気を生み出している



建物は表側と裏側では外観デザインが違う。これは隣接した「赤レンガパーク」方向から撮影した2号館の北側の夜景で、美しくライトアップされた姿が、『港町』の雰囲気をいっそう盛り上げている

横浜赤レンガ倉庫

1号館管理室 〒231-0001 横浜市中区新港1丁目1番
電話:045-211-1555

建造物であった。長く横浜港の繁栄を支え、
 多くの赤レンガとして親しまれてきたが、し
 かし、平成元年には使用が中止され、その
 まま打ち捨てられた状態になっていた。
 一時は、取り壊しも検討されたそうだが、
 横浜市が土地と建物を大蔵省(当時)から取
 得し、「港の賑わいと文化を創造する空間」
 として活用を行うことを決定。そして、一号
 倉庫を(財)横浜市芸術文化振興財団が管理
 する文化施設とし、一部に商業施設もあり、
 二号倉庫をキリンビールやサッポロビールなど
 が出資した株式会社横浜赤レンガが手がけ
 る商業施設にコンバージョンしている。
 『再生』に当たっては、「横浜」という街が
 持つエキゾチックな魅力を伝えることを第一
 に、挑戦する。「トライ」とイキキとした場
 である。「ライブ」を合わせた、「トライブ」と
 いう造語を考えるなどして、徹底したコン
 セプトワークを行った。そして倉庫が持つオ
 リジナルなテイストを大切にしながらも、現
 代的な要素を加えることで、まさに横浜ら
 しいエンターテイメントゾーンに生まれ変わ
 らせることに成功している。だがそれは、同
 倉庫だけの力ではなく、倉庫が建っている一
 帯が持つ『土地の記憶』を大切にしたり、面と
 してのストックの有効活用が、港の持つ魅力
 を再発見させたことにある。港を訪れる人
 の数は年々増加し、リピーターも多いという
 事実が、その証拠と言えるだろう。

(文責・CEL編集室)

CEL